

# 金山町だからできる 地域住民の自律を

5年間に亘り、金山町まちづくりアドバイザーとして学生とともに町で活動してきた蜂屋氏から、「これから地域経営に必要なもの」などに言及した、多くの示唆に富む寄稿をいただきました。



金山町まちづくりアドバイザー  
金沢大学地域連携推進センター准教授  
蜂屋 大八 氏



「大学環ネットかねやま」事業では多く学生が金山町を訪れた。地域全体を学習の場とし、町民の営みの暖かさや強さにふれながら学びを深めた。

首都圏の大学生を金山町に招いて学術的に金山町を評価してもらおうという総務省の域学連携事業の採択に際して、平成25年度から5年間にわたって金山町まちづくりアドバイザーの肩書きをいただいで活動してきました。総務省事業の後、単年度の域学連携事業の発展形として、「大学環ネットかねやま」を設立いただき、継続して金山町の学術的評価を図ってきましたが、この事業も解散となり、平成30年度にて退任させていただくこととなりました。これまで、横浜国立大学、東京工業大学、筑波大学、宇都宮大学、聖心女子大学など多くの首都圏の大学生の調査先や民泊受け入れ先として、ほぼ町内全域のみなさまにお世話になりましたこと、この場をお借りして感謝申し上げます。

さて、私は山形市生まれですが、山形大学に勤務していた平成16年に職員研修の一環で、当時、最上市町村圏事務組合・最上教育研究センターの所長を務められていた樋口勝也前教育長に出会うまでは、金山町とのご縁はほとんどありませんでした。この出会いが契機となり、最上8市町村を巻き込んだ「山形大学エリアキャンパスもがみ」が設立され、年間を通じて約300人もの山形大学の学生が「もが

み」で学んでいます。この事業は、私が山形大学を退職した後も継続し、すでに14年になろうとしています。この間、金山町の取り組みの中からは、金山を愛する学生達の活動団体「チーム道草」が生まれ、さらにその活動の中から山形大学職員になった学生が生まれたことを思うと、わずかながらも金山町に貢献できたことを実感できます。この事例に限らず、学生達は「もがみ」で学んだ後、一様に目の輝きを増して大学に戻ってきました。地域を知らない学生達にとって、地域社会の基礎にある人々の営みの暖かさや強さを、「もがみ」の活動が教えてくれたからです。このような地域の人びとによる教育をさらに実践してみたいと、20年間事務職員として勤務した山形大学を退職し、大学教員の職に転じました。現在の職を後押ししてくれたのは、金山町とのご縁だったということです。

大学教員となり、「博士」学位取得のための研究テーマとなったのも金山町でした。この年、これも実に不思議な縁で妻を金山町からもらうことになりました。妻を観察していると、同じ山形県人なのに私には不思議に思えるほど、親戚関係、近所づきあい、友人関係などなど、幾層もの関係性が結び

合い、人間関係を煩わしく思わず、むしろその関係性にお世話になって生きてきたことがわかります。このような人々の関係性は、絆、信頼、お互いさまの気持ちからなる「社会関係資本」と言われ、日本全国の中山間地域で見られます。東日本大震災からの復興の過程でにわかに注目を集めました。東北には元々このような関係性が存在していたのが次第に薄れ、金山町には特に色濃く残っているのではないかと考えられます。私の娘は、まだ妻が金山町に暮らしていた頃に新庄の県立病院で生まれましたが、特段お知らせをしていないのに、翌日には田茂沢地区の方が、我が家に娘が生まれたことを知っていました。何という情報網でしょうか。この関係性は、個人情報保護が重視される都市部では問題となるかもしれませんが、私にはとても暖かいものだと感じられるのです。近年では、山形市の実家に帰るより、金山町に帰る方が心地よいと感じるようになりました。それは私たちを待っていてくれる人々がいる町だからです。妻はいつもただ笑っていることしか取り柄のない人間ですが、彼女を見てみると、金山町の皆さんにかわいがっていただいで大人になったということをつくづく感じ、人を育てる金山町の町

民性を実感できます。妻という人間を育んでくれた金山町のみなさんに、本当に感謝しています。これらは、金山町のみなさんにはごく当たり前のことですが、この町民性が何ものなのか、どこに由来しているのか、とても気になる。博士論文にまとめました。私は、金山町から妻をもらっただけではなく、博士の学位までいただくことになりました。

金山町は町制施行以来、一度も合併を経験せず、現在の町の形は藩政期の村を基本として成り立っています。現在、31地区ある各地区の多くは藩政期の「郷」や「枝郷」に由来しています。長年町の形態を変えずに来たことが、金山町の町民性の第一だと思えます。金山町まちづくり条例は、この地区を自治の根幹と位置づけ、町はそれを支援するとしています。条例が町の基礎

部である地区の自律を促している訳ですが、それを担保しているのが、各地区の公民館とそこでの活動ではないかと考えています。金山町では、生涯学習の場としての中央公民館と、地域づくり拠点としての各地区公民館の機能が明確になっています。私が、金山町の全地区公民館にヒアリングを行

った結果、ほぼ町内の全域にわたって契約講、お日待ち講、念仏講、若連、消防団、婦人会、若妻会などの活動が行われていることが分かりました。そして、その活動の中で、知らず知らずのうちに、年配者から若年者へ、この地に暮らす意義や価値観の伝達が行われ、いつしか受け手側もそれを受容し、私益よりも公益的な視点を有するようになることができました。このような公益的な視点を持つ町民が町内の全域で育成されていることで、金山町の特徴的なまちづくりが可能になったのではないのでしょうか。松田貢前町長は、「大きな家族、一つの自治国という意識で、今日までオンリーワンの町づくりを進めてきました」と記されています。家族がばらばらの方向を向いていては家庭が崩壊します。各地区の公民館活動によって育まれた金山町民の意識の蓄積がこの「大きな家族」なのではないのでしょうか。

現在、金山町に限らず、我が国の地方部は少子高齢化や産業の衰退に伴う危機にあり、今後数十年で896の自治体が消えてなくなるとのシヨッキングな予測があります。しかし、私は、人口が減っても地域は消滅しないと思っています。特に金山町のような求心力を持った地域の自律は可能だと思

っています。AIが人間の業務に取って代わるなど、行政の形は大きな変革を余儀なくされる将来、地域経営に求められるものは、地域住民の自律だと考えます。既に住民が地域運営の協議会を設立し、撤退したJAのガソリンスタンドの経営を引き継いだり、山間部のコンビニを経営したりする地域も出てきました。私は現在富山県のある地域で、同じような地域経営体を構築する支援を行っています。これらは、「攻め」であるといえます。自治体行政が縮小していったとしても、こうして住民が自律して自分たちの暮らしを守ることであれば、その地域が消滅することはありません。金山町の町民性は、このような取り組みに十分に耐えうるものと思っています。いま、嵐の前の静けさの中で、あえて将来を見越して「攻め」に出ていくことが肝要です。

「右肩上がり」の発展が見込める時代ではないことを認識して、右肩下がりのカープを緩めるために、攻めの一手を打つ。金山町にはそれが可能だと思えます。私はこれからも、金山町のことを考え続けます。それが私にできる金山町へ唯一の恩返しだと思うからです。